

第33回夏期福音特別集会 第4回聖書講筵 復活体

——ルカ伝第24章33～43節——

伊東 1986年7月27日

小池辰雄

第三の旅人 霊体は原子爆弾で爆破されない「あらゆる過ぎゆくものは映像たるのみ」「愛と歓喜をもって神聖なる太陽へ」ルカ伝は心の福音書 詩は人類の母語 『パリサイ精神と戦う』大責任と大使命と大光栄 神の似姿 キリストを撫でる「君たちは本当だよ」

【ルカ24】

³³斯て直ちに立ちエルサレムに帰りて見れば、十一弟子および之と偕なる者あつまり居て言う、³⁴『主は実に甦えりて、シモンに現れ給えり』³⁵二人の者もまた途にて有りし事と、パンを擘き給うによりてイエスを認めし事とを述ぶ。³⁶此等のことを語る程に、イエスその中に立ち「『平安なんじらに在れ』³⁷と言い」給う。³⁸かれら怖じ懼れて、見る所のものを霊ならんと思いに、³⁹我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、霊には肉と骨となし、我にはあり、汝らの見るごとし』⁴⁰「斯く言いて手と足を示し給う」⁴¹かれら歡喜の余に信ぜずして怪しめる時、イエス言いたもう『此処に何か食物あるか』⁴²かれら炙りたる魚一片を捧げたれば、⁴³之を取り、その前にて食し給えり。

●第三の旅人

「日曜日」という言葉は、ラテン語では「デインス・ゾリツシュ」「太陽の日」という。オランダ語はドイツ語と似てますけれども、オランダ語でも「ゾンターク」という。それを日本人が聞き間違えて、「ドンタク」と言った。土曜日は半日で、日曜の半分で、「半ドン」というのはそこから来たそうです。そういう太陽の日。

「キリストは義の太陽である」

と、マラキ書に預言がありますが。正に、復活のキリストが墓を蹴破って出て来られた。ローマの兵隊どもが驚いて逃げて行った。それは福音書のどれにも書いてある。天使がこれを告げた。マグダラのマリヤたちが驚いて、これを使徒たちに告げた。歴史を両断するところの出来事です。

エマオ途上のキリスト、第三の旅人。我々にはいつもその第三の旅人が前になり後ろに



なつて歩いてくださっている。

「今日も明日も次の日も進み行くなり」

というわけです。

「旅は道伴れ世は情け」

というけれども、この道伴れは正にキリストです。召団讃美歌の第一番がそれです。皆さんとお別れしても、一人びとり、我々みんなにキリストは影の形の如く——形の影ではない、キリストが形です——進んでくださる。人生の終わりまで、地上の生涯の終わりまで、それから更に次の世界に向かつて。我々の地上の生涯は序曲ですから、本曲はあちら側です。昨日は盛んなる夕餐ですが、今日は盛んなる生命の世界です。

24章の33節から、

³³斯て直ちに立ちエルサレムに帰りて見れば、十一弟子および之と偕なる

者あつまり居て言う、³⁴『主は実に甦えりて、シモンに現れ給えり』³⁵二人の者もまた途にて有りし事と、パンを擘き給うによりてイエスを認めし事とを

述ぶ。

「この二人の者」というのはエマオ途上のことですね。パンを裂いてブドウ酒を飲むという、「聖餐式」といってますけれども、ヨハネ伝の6章の、

「我を喰らえ、我を飲め」

が正にそれなんです。「信ずる」ではない。「食べ、飲む」んです。キリストの霊体を、生命を食べる。生命を飲むわけです。非常に具体的な表現なので、「何を恐ろしいことを言うか」とユダヤ人がなじった。

³⁶此等のことを語る程に、イエスその中に立ち、

戸は閉じてであろうと何であろうと、入って来るんだから、大変なものだ。霊体というのは我々の想像のつかない、しかも非常に具体的なものです。

『平安なんじらに在れ』と言ひ給う。

ヘブライ語では、

「シャーローム・ラーケーム」

という。ユダヤ人は、「こんにちは」でも「さよなら」でもみんな「シャーローム」という。

「平安」という字です。一番素晴らしい挨拶ではないですか。「さようなら」というのは

「shalom」

といって諦めているんだ。

「そういうことならば、別れましょう」

と。ドイツ語では

「アウフヴィーダゼーン」「またお会いしましょう」

というのが「さよなら」だ。「グッドバイ」というのは



「ゴッド・バイ、神様が一緒にいらつしやるように」ということ。これは「シャーローム」、

「神の平安、キリストの平安があなた方にあるように」ということです。今日はみんなお別れするときに、「シャーローム」と言おうかな。

● 霊体は原子爆弾で爆破されない

37 かれら怖じ懼れて、見る所のものを霊ならんと思いに、

幽霊かと思った。その通り書いてあるからいいですね、あるがままに。おじ恐れた。「なんだこれは、化け物か」と思った。

38 イエス言い給う『なんじら何ぞ心騒ぐか、

我々は波で、しようがないね。すぐ騒いだり、いぶかしがってみたり。

何ゆえ心に疑惑おこるか、

騒いだり、懼れたり、疑つたり、惑つたりする。

39 我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、霊には肉と骨となし、

我にはあり、汝らの見るごとし』

39節、これを私は今日は掲げた。こんな所を掲げて話をする牧師さんがいたかないか知らん。私は或る聖書研究会、神学のグループにいた時に、このところに来たら、みんなが笑った。私はそれでもって、そのグループから出た。一流の学者たちです。

「我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、霊には肉と骨となし、

我にはあり、汝らの見るごとし」

という。

「わが骨の骨、わが肉の肉」

とは、最初にアダムがエバに語った言葉です。これは聖書の一番古い詩なんです。アダムのあの言葉はエバに向かいましたが、我々はキリストに向かってこれを言う、

「あなたが私の骨の骨、肉の肉です。原子爆弾で我々の身体はすつ飛ばうとも、あ

なたの骨の骨、肉の肉は、この霊体は原子爆弾で爆破されない。私たちは絶対に

死なない」

と…(異言)…キリストをそれほどに私は受けとりたい。キリストが私の生命であるということは、本当にこの肉体の奥に霊体が形成されつつある。大変もつたないはなしです。

「身体髮膚之を父母に受く、之を毀傷せざるは孝の始なり」

と『中庸』の中にあるけれども。父母から受けたこの肉体は、今度はキリストから受けた霊体に甦って行く。クリスチャンの現実とはそういうわけです。そのようなキリストの霊が充満しますから。ペテロやパウロのあの使徒行伝を見てごらんさい。着ている服の房に触れば、病が治ってしまうという。パウロの場合もあった。そういう生命が働く。本当



に生命の生命です。

「我を信する者は死ぬとも生きん。死なず」

という。我々は、そのような

「キリストと一体」

というのは、形容で言っているのではない。同質な霊体のみ霊においていただくわけです。こういう音信は仏教にはない。このキリストの福音だけがもっている。何と熾んなる生命であるかと。キリストは、

「二日目に甦る」

と言われたが、日曜日到我々はそのようなキリストにぶつかって、その生命をいただく。これが日曜日の本質なんだ、本来。だから、

「聖日を、日曜日をいい加減にするな。永遠の生命は要らないのか」ということです。

●「あらゆる過ぎゆくものは映像たるのみ」

これはゲーテの『ファウスト』の最後の句です。ドイツの詩の中でこれ以上の言葉はない。

Alles Vergänglichhe

Ist nur ein Gleichnis;

Das Unzulängliche,

Hier wird's Ereignis;

Das Unbeschreibliche,

Hier ist's getan;

Das Ewig-Weibliche

Zieht uns hinan.

次の二行は私が付け加えた。

Mit Lieb' und Wonne

Zur heiligen Sonne!

最初の二行の、

Alles Vergänglichhe (アッレス フェアゲングリッヘ)

Ist nur ein Gleichnis; (イスト ヌール グライヒニス)

あらゆる過ぎゆくものは

映像たるのみ。

我々の過ぎ行く地上の一切の事柄、また、過ぎゆくこの花、これはやがてしぼんでゆく。それは「映像」であって、何の映像かというと、過ぎゆくかざるものの映像である、永遠なるものの映像であるという。「永遠なるもの」ということはここに書いてありませんが、そ

ういうことなんです。我々のこの肉体は過ぎゆくようなわけだけでも、しかし、過ぎゆかざるところの霊体の映像である。お互いにその存在において、不滅の存在をそこに見ていく。天国に行っても、次の世界に行っても、

「私は君を知らないよ」

なんてなわけではないですね、みんな。

これから100年経つかたまたないうちに、みんな我々は向こう側だ。もう少し長く生きる人があるか知らないけれども。大体そうでしょう。若い方は、そんなことは全然考えないでしょうけれども、私はもう80になると、多少考えないことはない。まあ、あとせいぜい20年でしようから。明日かも知れない。

とにかく、これは「影」に過ぎない。私は影ですから、本ものの影が今ものを言っている。それが「グライヒニス」です。だから、

Das Unzulängliche, (ダス ウンツレングリッヘ)

Hier wird's Ereignis; (ヒア ヴィルツ エアライクニス)

達し得られざるもののもの

この天界に於いては事実となっている。

事実となるのだと。

「地上でもつて、どうもそこまではいきません」

ということが、実は事実になる。ゲエテというのは凄い詩人だ。これだけのことを言う詩人は日本にはいないでしょう。やはり、ゲエテは聖書を本当に身に付けていたから。ゲエテは聖書を一番愛読していた。

Das Unbeschreibliche, (ダス ウンベシュライプリッヘ)

Hier ist's getan; (ヒア イスツ・ゲターン)

筆紙に尽くし難きもののもの

書き得ざるところのもの、言葉を越えたもの、

それはこの天界においては為されたのである。

「天界において為されていることはとうてい書き得られない。

私の筆も折れてしまう」

という気持がゲエテの最後の気持なんです。彼も最後のピュンクトをなかなか打ちにくかった。ダンテも同じことです。

●「愛と歓喜をもって神聖なる太陽へ」

あとはゲエテらしいんだ。

Das Ewig-Weibliche (ダス エービツヒ ヴァイプリッヘ)

Zieht uns hinan. (ツィート ウンス・ヒナン)



永遠に女性的なるものが
我らを引き上げて行く。

「永遠に女性的なるもの」というのは、男女の愛の世界がもちろんゲーテには映っています。キリストを本当に信じ抜いて、そして最後まで残っていたのは女性たちです。

「歴史をつくるものは女性である」

と、こないだも言いました。偉い人のお母さんの魂はみんな素晴らしかった。だから、女子教育は絶対に大事なんだ。敬虔^{けいけん}なる、神・キリストを信ずる、そういうような女性でなければ、日本の教育の将来は本当に望みはない。学校ではない。家においてお母さんがどのように子供を育てているか。これが一番のポイントなんです。私は女学校の校長になればよかったな。

それで、どこへ引き上げていくかということ、それはゲーテは言っていない。そこで私は付け加えてやった。

Mit lieb' und Wonne (ミット リープ ウント ヴォンネ)

Zur heiligen Sonne! (ツール ハイリゲン ゾンネ)

愛と歓喜をもって

神聖なる太陽へ。

と。ちゃんと韻を踏んでいる。「神聖なる太陽」とは神さまです。

ゲーテは自分を

「ゾンネン・キント」(太陽の子)

と言って、時計がお昼の12時を打った時に、チーンチーンと鳴って短針も長針も中天を指している時に彼は生まれたと、お母さんから聞かされている。だからゲーテは、

「自分はゾンネン・キント、太陽の子である」

と言っている。

『ファウスト』は「デイ・ゾンネ」「太陽は」で始まっている。

Die Sonne tönt nach alter Weise. (ディ ゾンネ トエーント ナッハ アルテル ヴァイゼ)

太陽は昔と同じ調べをもって動いている。

という。その句で始まっているから、最後はやはり「ゾンネ」で終わるべきはずだったのを、ゲーテは忘れたか何か知らんけれども、私はゲーテを完成してやった、

「愛と歓喜をもって

神聖なる太陽へ」

と。これは世界中に私ひとりだ。それは聖霊の智恵がかく言わせる。あのキリストの変貌は素晴らしく光ったでしょ。その太陽のキリストへと引き上げていく。キリストは曙^{あけ}の星であると同時に太陽である。星が好きだったのはダンテです。瞑想の詩人ダンテ。夜の詩人ダンテと昼間の詩人ゲーテ。だから、私はゲーテとダンテが好きなんです。『芸術のたま



しい』に両方とも書いてあるでしょ。

「地上では未完成であったり、どうにもならなかったりすることは、みな天界では為し遂げられているぞ。それは完成するぞ、三日月は満月になるぞ」

というわけです。我々は満月を約束されているところの三日月だ。三日月だか、半月だか知らないけれども、私なんかは細い三日月みたいなものだ。そういうのが、与えられている希望なんですよ。未成交響楽というのがあるが、それはかしこにおいては完成された交響楽です。地上においては誰だつて本当は未完成だ。

あなた方一人びとりが、その生まれつきの天性が本当に完成することが約束されている。キリストに在つて約束されている。どこでぶっ倒れても、

「アーメン、ハレルヤー！」

というわけです。何も心配ない。天界に行つて、ただ歌ばかり歌っているわけではない。それぞれの仕事が一別な形で展開していく。私はダンテも書かなかつたような天国を書くつもりですから。

●ルカ伝は心の福音書

ところで、皆さん、一体、ルカ伝を読まれて何を感じられましたか。ルカ伝を総括するただ一つの言葉がある。どこにあるかな。

「汝らの父の慈悲なるごとく、汝らも慈悲なれ。」(ルカ6・36)

という言葉です。あわれみ深くあれという。

「恵福なるかな、憐れみある者、その人は憐れみを受けん」

という。

「汝らの父の全きがごとく全かれ」

というのはマタイ伝ですけれども、ルカ伝の特色はその慈悲にきているわけです。愛なんです。

「父の愛なるごとく、汝らも愛であれ」

と。「慈悲」という字は「アガペー」「愛」という字ではない。「慈悲」という字は別の字です。情け深いということ。情け深い心の最後の現れ方は、己が身を棄てることです。

「その友のために己の生命を捨てる、これより大いなる愛はなし」

とキリストが言われた。

内村先生の『聖書の研究』という雑誌の第142号に或る詩が載っている。

「ザ・タイトニック」

という詩です。あなた方はまだお若いから知らないけれども、私は小さい時にそれを覚えている。明治45年の2月です。世界最大の汽船の処女航海です。大西洋を渡つてアメリカへやって来ようとした時に、ニューファンドランド沖で大きな氷山にぶつかった。それで



タイタニックは沈んだ。非常に著名な人がたくさん乗っていた。その時に救命ボートが足りない。船長は

「女の方と子どもさんたちはどうぞお乗りください。我々は沈んでいきます」
と言って、男は残った。女の人と子どもはみんな救った。その時に

「主よ、みもとに近づかん」
を歌いながら、この男の船客たちは沈んでいった。

「汝ら、父の憐れみ深くあるごとく憐れみあれ」
というのを彼らは実証した。

今は、先を争って席を奪ってしまったたり、シルバシートに若いのが腰かけて、しかも若い女性が、そばにお年寄りが立っていても平気な顔をしている。こんなことでは日本は亡びます。教育は、本当の心の教育ができてない。日本人は何よりも先生方が、教師が悔改めてかからないとダメです。教育の一番大事なのは先生それ自身、親それ自身です。福音を土台としないような教育なんてものは、いくらやっても本当はダメなんだ。そういうわけで、どうぞ皆さんは、福音の深い憐れみを本当に伝えて行くところのひとになってもらいたい。この憐れみの愛には、何ものもかなわない。

ルカ伝は心の福音書です。とてもこの三、四回で徹底してお話はできませんでしたけれども。一端を本当につかまえば全体を掴まえることになる。本もそうなんですよ。その本のポイントをしつかり読みなさい。そうしたら、もう全体を読んだことになる。聖書も、福音書のどれでもいいよ、本当にひとつを身につけることです。

「私の中にはマタイ伝が生きています。マルコ伝が生きてます。ルカ伝が生きてます。ヨハネ伝が生きてます。マタイ伝はひつちやぶいても大丈夫です。ルカ伝は引破いても大丈夫です。私の中に生きています」

というような掴み方をしていないとね。青年諸君は是非それをやりなさい、気遣いのように。昔は、教育は本当に鍛えた。今は本当に鍛えが足りない。すべてがあんちよこだ。余計なことを言うけれども、中学校の一年の夏休みの宿題は、

「小学校で習った漢字を全部書き上げて——しかも、毛筆だよ——その音と訓と熟語を書いてこい」

と、これが宿題です。私はそれをとってあって、獨協中学・高等学校に寄付した。私たちはこういうことをしてきたと。

とにかく、皆さん、何か、
「自分はこれをやるぞ」

という事をつかまえてやってください。ひとまねは要らん。



●詩は人類の母語

中学時代に私の心の、ハートの或る一つの大事な要素を作ったのは英語の詩でありました。今の英語の教科書を見ても、詩なんか余りないようだね、ただ会話だとか。テニソン、ワーズワース、ロングフェローの英詩は素晴らしい。それはドイツ語も同じことです。

「詩は人類の母語である」

という。母の言葉。最初で終わりの言葉です。

聖書も、これは詩なんです。詩篇ばかりではない、預言書も全部これは詩なんです。キリストの福音書、キリストの言葉がまたこれ本当に詩です。マタイ伝を見れば分かる。何も形式的な詩を言っているのではない。心のリズムがある。心のリズムが内面的な詩を持っている。人生は散文でない。非常にリズムカルなものです。詩のリズムの一番基本となっているところは、音楽なんです。だから、素晴らしいんだ、音楽というのは。ベートーヴェンも第九シンフォニーの第四楽章には、シラーの詩をのせたでしょ。もう渾然として、彼はあれをのせざるを得なくなりました。本当に神を讃美する。だから、讃美歌は、あなた方はみ霊で歌っているから、本当に力があつて、聞いていて本当に楽しい。そうなくて、ただうまいへたなんてことを気にして歌っているのは、ひとつも響いてこない。

私はロングフェローの

「サム・オブ・ライフ」(人生の詩)

という詩を最初にのせた。是非こういうのを教えてください。それを教えながら、福音のことが自然に語られていくんです。わざわざ聖書のことを言わなくなつて。そうして、しみ込んでいく。ドイツ語でも英語でも何でも大いにやってみてください。学校でも塾でも何でもいい。卒業した生徒たちが時々私に手紙をよこす。こないだもよこした。

「先生が本当にあの詩を教えてください。くださったことが、今本当に響いて来ました」

と。私は驚くです、何十年も前のことを言われるから。私は学校で語学のための語学なんて絶対にやってないんだ。言葉というのは、その民族の精神を表現したものですから、それの一番粹なるものは、やはり詩に表れている。

『玉髄集』(著作集第八巻『詩歌集』239頁)に「人生の詩」と題して、ロングフェローの詩を掲げた。

『人生の詩』(サム・オブ・ライフ) ロングフェロー

言つ勿れ悲しきしらべに、

『人生は樺花』一朝の夢!』と。

魂魄まごころみて死に似たるとも、

見ゆるところは真相に非ざれば。

人生は真実なり、

人生は厳粛なり。



磐穴いわくさいかで
おはり
終結おわりならんや。

『塵ちりより出いでて塵ちりに還かえる』
そは靈魂たましひの謂いにはあらず

我々は塵から出て塵に還るようなことは、創世記のところにも書いてあるけれども、それは魂のことではない。いや実に、この塵に還るような肉体の後から霊体がやってくることは、コリント前書15章でパウロがたまたみかけて言っている。

楽しみも悲しみも

わが命数さだめにも

道路みちにもあらず、

路みちは実存みづかにあり、明日あすの我われは

今日の我われを乗り越こえてゆく。

こういう言葉に私は感激して聞いてたんだ、中学校のときに。

たくみ なが
芸術げいぎゆつは劫ときよく

時世ときよは流ながる。

われらが心臓こころ

縦よし堅かくして勇ゆうむとも、

音ねもかそけき鼓つづみの如ごとくつねに奏かなづ

奥津城おくつぎに到いたる

埋葬まいざいの曲まがを。

此世このよの戦いくさの広ひろき場ばにて

人ひとの生命いのちの露つゆ營えいの野のにて

もの言ことわぬ牛馬うまとして駆からるる勿なれ、

戦闘たたかひの丈夫ますらをたれよ！

楽たのしからん後あとの日ひをたのむ勿なれ！

逝しきし死しをして死しを葬まうらしめよ。

本当の戦士であれと。「死をして死を葬らしめよ」というのは、聖書の間違えた読み方なんです。今でもみんな大体間違えているけれどもね。

「死者は葬儀屋に任せよ、お前は神の国を伝えろ」

とキリストは言われた。

「マッター（死者）はミッター（葬儀屋）に任せよ」

というところを、両方とも「マッター」（死者）にして、しまったということになった。その時のアラミ語をギリシャ語に直す時に間違えた。これははつきりそうだ。

「死人は葬儀屋に任せなさい。お前は神の国を伝えろ」



と、キリストは普通の事を仰った。何だかんだと言って、大饗宴をみんな断つたでしよ。神第一、福音第一の生き方をしないと、これは人生で敗北する。

働け！ 働け活現の今！

衷うちに心こころ情じやうあれ、

上に神かみ在ありませば！

偉人いじんの生涯せいがを想おもひては

われらが生いを崇高こうかうになし、

離別わかれに臨まりて我われらも

時の砂漠さぼくに足跡あしあとをとどめばや。

足跡あしあと、そはおそらく兄弟けいだいの、

人の世よの厳げんかなる海原うみを漕こぎゆきし人の。

これを見て寄よるべなき難破なんぱの者は

再び勇ゆうみ振たり起たつらん。

いざ我われら起たちて為なさむ、

万難ばんなんに耐たつる心根こころねをもて

いよいよ達としてはいよいよ追もと求め、

働くを学まなび、待まちつを学まなばん。」

最後の句は素晴らしいね。こういう詩が私の中学時代の心を打った。いつまでも忘れない。

次に、ウォーヅウォースの『虹』という詩を紹介します。(『詩歌集』241頁)

『虹』(レインボウ) ウォーヅウォース

わが胸むねは欣よろこび躍たぎる、

大空おおぞらに虹にじをし見みれば。

人生じんせいの曙あけに然しかかりき、

成人せいじんの今いまも然しかかあり、

老年らうねんの暮くれも然しかかあれ。

然しからずばわれ死しなまほし！

幼わか児こは成人せいじんの父ちちぞ。

魂たま極まる生涯せいがの日ひ々々を

結むすびてよ生うまれの虔こころ心しん。

●『パリサイ精神と戦つ』

あなた方、第八巻を愛読してくださいよ。私のラブレターだから。ところで、第八巻でまだ読みたいところがある。それは今私たちがいろんな事態にあつて、特にこの福音の世界、宗教の世界では、パリサイ的なものがどうもあつて困る。それには絶対に戦つていく。パ



リサイとの戦いのことを歌った詩がある（『詩歌集』88頁）。

『パリサイ精神と戦つ』 彼岸 1951年10月26日

20世紀は神を無視する。

サタンに奔弄ほんろうされてもわからない。

罪と死と地獄とサタンから、

これは、暗黒の四位一体です。

ローマの「バビロン捕囚」から、

このゆがんだ文明に捕らわれていることを、「ローマのバビロン捕囚」と言った。

十六世紀を解放し

これは宗教改革のことですけれども、私が今言ったのは現代のこと。

神の自由の世界へと

道を拓いたルッターよ！

汝の勝ち得たキリストの自由は

はやくも罪びとの自主の自由に

墮おしてしまつた、禍わざわいなる哉！

「自由、自主」と言うけれども、みんな自己本位の自由で、人本主義、人間本位です。天動説になつて、地動説でないんだ。我々は福音の世界でコペルニクスの転向をさせられた。我々は神中心にうごく。太陽中心に動くところの地球と同じことだ。義の赫々たるキリストを中心にグルグル回転していくのが我々の生涯です。ところが、今の文明は、物理の世界では太陽が中心で動いていることを知りながら、精神界では相変わらず天動説をやっている。地球は動かないで、自分が中心で人間中心でやっている。そんな自由はひとつも自由ではない。実は捕らわれている。それをひっくり返したのが、このルッターの宗教改革でしょうが。だから、ルッターの宗教改革は、物理のコペルニクスの転向をこの精神の世界でやつた。このことは私は『随想集』の最初のところの「武蔵野の瞑想」に書いたつもりです。

十字架のあがないに感泣し

キリストの生命に歓喜し、

聖霊のみなぎりに躍動しつつ

時のパリサイ精神と烈しく戦い

ウォルムス議場でNEIN（ nein ）と雄叫びせし

わが自由の戦士ルッターよ！

天上にて祈れかし。

我らの主イエス・キリストの敵

「偽善なる学者。パリサイ人」は

預言者の昔からこの末の世に至るまで



神の国の蹟きものぞ！

観念信仰に枯死せんとするエクレシヤを

「恩恵」の光で復活せしめんと

神は今愛憐^{あわれみ}を起し給う。

ちゃんと書いているね、30年前に。

聖霊の此の啓示に従って

我ら小さき群の動けば、

パリサイ的な人々はみな

我らを「異端」として斥ける^{しりぞ}。

聖名のためかく謗^{そし}られることが

預言者・使徒らの霊統ならば

我ら何をか憂えよつ。

パリサイ精神の諸々の敵に向かつて

かのステパノは叫んでいった、

「汝らはつねに聖霊に逆らう」と。

この殉道の先駆者の死を目撃した

パリサイ人サウロが、「復活の主」の

聖光に打たれてパリサイに死し、

パウロはパリサイに死した。パリサイのチャンピオンだったんだからね。

福音の使徒となった

あの鮮かな事実からこそ、

我らがパリサイ精神と戦って

ステパノの祈りと共に

敵を救わん悲願がやどる。

●大責任と大使命と大光栄

載せた詩は、みんなその当時のままで、私はちよつとも改めていない。そういうパリサイとの戦いは敢然として戦う。私の相手のパリサイは無教会だから。聖霊を受けないで、ただ

「十字架、十字架」

と言っている。観念十字架だ。それで、私は無教会から棄てられた。あり難いです。

「家造りの棄てたる石は隅の首石となれり」

という。キリストが、

「お前を隅の首石にしてやるぞ」



と。棄てられて結構だ、ありがとうございますと。無教会になんか迎えられなくて結構だ。烈々たるものが、煌々たるものが私の中に光って進んでいく。人には見えなくなつて一向差し支えない。皆さんが、一人びとりそうです。召団はそのような本当の戦士としてある。しかも、その戦士のハートは深い憐れみの心です。

マルコ伝ではもの凄い行為の世界を展開して来た。ルカ伝は深い心の世界です。「ナルドの香油」がそうです。キリストは本当にこれを受けとられた。全存在をもつて、アラバストロンの壺をぶちわつて、あの高価な香油をキリストの全身に注いだ。ルカ伝に

「或る罪ある女」

と書いてある。それをキリストはこよなく喜ばれた。全存在でもつて本当にキリストにその愛を捧げたわけだ。我々も生涯そのものをキリストにそのように献げる。

「信ずる」ではないんです。「信ずる」というのは、キリストの愛を受けとることです。受けとつて、その愛をもつて、

「心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、主なる汝の神を愛すべし。また

隣人を愛すべし。これは同じことだ」

と言われた。愛は上に展開していくと共に、今度は、横に展開していく。もの凄い火は上に上がると同時に横に動いていく。愛の炎は上と横へ両方に流れていく。生命の質は愛です。

ルカ伝の中心はそのようなところにあつたということをもつといろんなところをあげればよろしいんですけれども——どうぞ、ご自分でもつてお読みになれば、

「ああ、こういうところがやはりルカ伝の愛の玉の緒がずっと貫いているんだな」

ということがお分かりになるわけです。しかも、キリストは水を割らずに全的におつしやる。

「その時には選ばれた者は一人も居なかつた」

なんてことになっては、とんでもない話だ。我々はそんな選ばれた者ではない。この使徒的信仰に選ばれたということは、聖名のゆえに、大責任と大使命と大光栄がかかっている。責任と使命と光栄とを、それは全部、キリストの証あかしとして我々はいただいて進んでいくわけです。これくらい生き甲斐のある人生はないではないですか。

人生とは何ぞやと。我々にとつては、

「キリストの証をなすこと、これなり」

と、はつきりしている。運命環境、いろんな事がいくらでも、天気が変わるように変わつてみる。絶対にこっちはキリストの光が貫いているぞと。

「私の信仰は……」

なんて、自分の信仰なんかを顧みている世界ではないですよ。

● 神の似姿

「何とも言いがたき事がここには成されている。」



事実となつていると。我々は現実においてその事実を既にいただきつつ行くわけです。だから、ゲートの『ファウスト』の最後の天界の事態が実は、

「天国は汝らの中に在り」

といつて、ゲートのこの最後の言葉は、これが我々の日常の中に実現しているところの、天国を実現しているところの、彼岸を此岸として動くようなのが、この聖霊の世界です。ゲートも驚いているよな。ありがたくて、言いがたない。

「神の根源の相」^{すがた}

これを「ウルビルト・ゴッテス」(Urbild Gottes) という。神の根源の相は、これを

「神の似姿」「エーベンビルト・ゴッテス」(Ebenbild Gottes)

と言っている。「同じ」「エーベン」とは「正にその相」^{すがた}のことで、これはキリストです。

「神はその相の如く人を造り給えり」

とある。あそこはドイツ語では「エーベンビルト」と訳すんだけど、この「似姿」に造つたところのこの「エーベンビルト」「正にその相」^{すがた}というのを現実に体現なされたのはキリストだけです。アダム、イブは「エーベンビルト」から直ぐ脱落してしまつた。パラダイス・ロストになつてしまつた。それを回復してくださつたのがキリストですから。生まれつきの我々を

「エントビルデン」(entbilden)

する。その姿を抜けてしまふ、これが

「身心脱落」

のことです。「エントビルデン」、身心脱落して——禅宗ではそれを一生懸命、修行でやるけれども。我々は十字架でもつて「エントビルデン」している——そして今度は、

「アインビルデン」(einbilden)

する。「アインビルデン」というのは、今度は、キリストの姿の中に入つてしまふんです。「エントビルデン」だけではダメなんだ。エックハルトの

「アップゲシーデンハイト」(Abgeschiedenheit)

という言葉がこの「エントビルデン」「脱落」です。けれども、脱落だけではダメなんで、今度はそこにキリストの姿が「アインビルデン」、姿が入つて来なければダメなんです。面白いでしょ。「アインビルデン」するけれども、現実の我々はなかなかそれが本当の現実にならない。これは信仰の現実だけれども。だから、今度は、その不完全な現実を常に乗り越えて行くことを、

「ウイーバービルデン」(Überbilden)

という。その姿を乗り越えていく。そして、本当にこの「エーベンビルト」の方に向かつていくわけだ。

「神より出でて神に還る」



と、ロマ書の何章かにパウロが言っています。

「凡ての者神より出でて神に還る」

と。エペソ書あたりもそうだ。みな一つになってしまおう。だから、我々は本当に祈りの世界でキリストと一如にされる。

「おきな幼児の如くならずば天国に入れない」

と言われたのはそれです。幼児の如くならないと、一如になれない。全存在をぶちまけることです、あるがままに。

「おかあちゃん！」

というわけで。

「主さまー！」

というわけです。だから、母を失った子は本当に可哀相です。けれども、深い憐れみの女性には本当にまた母の代わりに、

「生みの母よりも育ての母が素晴らしい」

という言葉があるわけです。どんな運命環境でも絶対行き詰まらないのがこの福音の世界なんです。いかなる差別も差別でなくなる世界がこの福音の世界です。

「男も女も何もみな同じだ」

とパウロが言ったでしょ。まあ、凄いよな、パウロの言葉を見ると、何といつても。

●キリストを撫でる

³⁹我が手わが足を見よ、これ我なり。我を撫でて見よ、な靈には肉と骨となし、

我にはあり、汝らの見るごとし』

と。「キリストを撫でて見よ」というのはどういうことですか、我々の現実において。何かただ神秘的な夢を見ることではない。自分の腕を撫でてください。そこにキリストがいます。これが「我を撫でて見よ」です。

「私の身体は私のものではありません。私の生命は私のものではありません」

と。自分の腕を撫でて、

「ここにキリストあり」

というように、キリストと一体な、キリストの生命を靈に於ていただいているようなところが、「我を撫でて見よ」ということです。

『わが肉の肉わが骨の骨』は汝であり給う。このさか旺んなる生命を何をもつて代えることができるか。地上で使命のある限り私は必ず生きていきます」

と、必ずそれだけのほりをもつて生きてください。

だから、私はこの句を掲げたくです。本当に生き生きとした事態で、病なんかとつかない。逃げていってしまうよ、向こうが。風邪をひかない。正直、私は聖靈をいただいて



から、病気にかからないですよ。

昔は、療養所に行くくと、結核が移るかと思つて、マスクしたり消毒したりした。中野の療養所を訪ねる時にはまだそんな調子だった。ところが、聖霊が来てから、全然それが要らなくなつてしまった。こちらから流れて行くからね。癩病の人にもいくらでも触つたです。とにかく質の変わった、次元の違った、絶対次元の世界をこの信の世界で、愛の世界で、み霊の世界で内側にいただく。これは体験するまでは、誰もいくら説明してもダメなんです。

「八万四千の法を説いても一つも説かなかった」

とお釈迦さんが言つたのと同じことだ。体験するまではどうにもならんよと。

「耳ある者は聞くべし」

とキリストが言つたのはそのことなんだ。

「耳ある者は聞くべし。体験してくれ。私が向こう側に行つてから、聖霊が来

たら、私が言つたりしたことがみんな分かるぞ」

とちゃんと言つてらつしやるんだ。使徒たちは皆それで初めて、

「ああそうだったか」

ということだ。

●「君たちは本当だよ」

まあ、私は無教会に何年いたかな。私は20歳の時、1923年に入信して、1950年に聖霊を受けた。その間27年間に無教会時代。無教会時代だけでも、よく考えてみると、私は単なる観念ではなかったよ。最初にもう既に聖霊のことを目指していた。だから、何かもの足りないことを私はもう感じ始めたんだ、無教会で。

それが爆発したのが、点火したのが、1950年の阿蘇のことだ。いやあ、凄かったよ、全身しびれてしまった。その前に、坐つてた身体がグーツと上に持ち上がったからね。

また、あの時は、女の方々の霊歌が素晴らしかった。20人位の女性たちが自然に霊歌を歌つた。その霊歌が期せずしてリズムをなしている。おそらく、前にも後にもあんな事はないでしょう。本当にペンテコステだったね、あれは。いやあ、驚いたね、私は。無教会にはおよそない現象が起きているから。

「これだ！」

と思つたね。

それで、自然界を見ると、もう本当に自然が輝いているんだよな。帰りの汽車の中で聖書を開くと、聖書のヴェールがとれて躍動している。こんなにパウロは聖霊のことを言つていたのか、今まで何を讀んでいたかと。もう無教会とはさよならだ。無教会も私を追い出した。いろんな不思議なことが起きるとね。

最初の、祈りでもつてカリエスが治つたのがあの川口愛子さんです。それは彼女もびつ



くりした。異言が止まらない。途中から私は静めた。

「先生、もう身心が軽くなつてしまつて、どういふんですか、これは」

と。それを塚本虎二先生に詳しく報告したら、先生におこられた。

「何者にたぶらかされたか」

と。『聖書之研究』誌に書いたんだよ、それを。私の名前はもちろん出さなかつたけれども、「何者にたぶらかされたか」と。ガラテヤ書の言葉です。

「そうか、あなたは塚本先生の仰ることが本当だと思うなら、それはあなたのご自由だ。私はキリストに祈つた。これは否定するわけにはいかん」

と私は言った。それで、彼女はやっぱり塚本先生の間違いだと悟つた。私はまた祈り返しに行つたんです。ガタガタになるとまずいから。冗談じゃないと。なにも塚本先生の悪口を言うのではない。塚本先生はその時に間違つた判断をなさつたが、あとで

「君たちは本当だよ」

と仰つた。やつぱり、み霊の世界は勝つた。このことは、まあ、書かないことにしましょう。あなた方にはしやべつてしまつたけれども。あんまり言わないでください。

そういうわけで、皆さんは、とにかく、キリストの直弟子の次元に、使徒たちの次元に、いよいよ楽しく入つていって、限りなく進んで行きましょう。我々十二召団は決して、「十二召団」と言つても、私は垣根をつくつていないのでない。十三でも、十四でも、いくらでも成つてくださいよ。だけれども、「十二」という数をもつて表現していきます。これは聖書的な、黙示録の最後の非常に完全な数だから。

何か語り足りないところがあつたか何か知らんけれども、もういい。大事なところは申し上げたつもりです。

「二つなき心を君に留めおきてわれさえわれに別れぬるかな」

これは「金槐集」の中の言葉です。素晴らしい句だね。これは恋愛の句ですけども。キリストに対する我々の愛は、「二つなき心を君に留めおきてわれさえわれに別れぬるかな」という。

「自分にさえ別れているような、そういう不思議な存在になりました。おのれを棄てました。己を憎みました。あなただけです」

と。その時にも、凄い力が来るし、生命がくるし、光がくるし、愛が来るし、もう名状しがたい。それが本当に無の世界なんです。

「山はさけ海はあせなむ世なりとも君にふた心わがあらめやも」

有名な源実朝の言葉だね。これも「君」といえばみんな、私たちにとってはキリストです。福音の光で読むといふものゝ生きてくるんだよな。終わります。

